平成13年　第84回～第94回

▲第86回「僕の俳優人生を変えた音楽」と題し，本会で聴いたＬＰレコードの音のあまりのすばらしさに，自ら出演をかって出られた浜畑賢吉さん

▲第87回「本当なの？本物のヴァイオリンをスピーカーにするなんて」オーディオ研究家、田村彰啓氏による手作りの大型真空管アンプの演奏を楽しみました。

▲第88回　ライブショウ「人生また楽しからずや」浜畑賢吉，カルロス飯田，本田成子，海宝弘之のご出演でメキシコの民謡「クリクリ」がご披露された。

▲第88回　クリクリの衣装でお客様を迎えられるカルロス飯田夫人。子供達に大人気だった。

▼第88回 名作「クリクリ」に感動し，最後まで聴きいった皆さん。

◀
第89回「レイオーディオで聴く，ギターによる音楽史」ご出演エッセイスト山口孝さん。本会始まって以来，もっとも音がよかった，と多勢に指示された，記憶すべきコンサートとなった。

▶
第90回「３大テナーが歌う世界の恋唄愛の唄」ドキュメンタリー作家倉持公一さん。何と右手前の自転車通勤でご出演された。

第92回　日本に数本しかないという1930年代生まれの巨大なスエスターン16Ａ（170kg）ホーンが出演。
▼

第92回「貴重なジャズSPレコード特集」講師新忠篤さんが登場した
▼

▲第93回　珍しい試みであるミュージックマイナス　ワン。LPに合わせて生演奏をするというコンサートだが，尾田さんのすばらしいSAXプレーに全員が酔いしれたひと時だった。

▲第93回「日本のレスター・ヤングと呼ばれる名テナーを迎えて」ご出演　尾田悟（テナーSAX），とお相手ジャズプロデューサーの森山博さん。

イベント

第91回千代田チャリティ・コンサート～ジャズはこう聴け、こう鳴らせ

来る9月19日㈬、文京区湯島の千代田テクノル本社ビル・ロビーで開催される「第91回千代田チャリティコンサート」に、本誌でもおなじみの寺島靖国氏と安原顕氏が講師として出演する。タイトルは「ジャズはこう聴け、こう鳴らせ」。

このLPレコードによるコンサートは「人類が生んだかけがえのないアナログレコードを大切にしよう」という、オルトフォン・ジャパンの前園俊彦社長の呼びかけで平成5年から始まり、毎月1回のペースで開催されている。テーマに沿ってゲストを招き、トークとLPレコードを中心に鑑賞する2時間の無料コンサート。有志からのチャリティ募金を募り、NGOを通じて世界の恵まれない子供たちに教育資金としてカンパを続けている。すでに9年間で500万円を超える募金がおくられるなど、注目されている。

このコンサートはジャズのプログラムも多く、北村英治、増田一郎、笈田敏夫氏など現役のプレーヤーを始め、瀬川昌久、児山芳夫、岩浪洋三、悠雅彦、中平穂積氏など、ジャズ評論家、また永六輔氏などジャズを好む文化人などが講師として参加、ジャズの啓蒙に努めている。

今回は明快なコンセプトをもとに歯切れよく辛口のジャズ&オーディオ評論を展開、多くのファンを持つ寺島、安原両氏が、ジャズに対し、あるいはケーブルを含めたオーディオ、ハード機器に対し、どのような姿勢を示すのか、興味のもたれるところ。

コンサートに来場を希望する方は、㈱千代田テクノル総務課☎03（3

コンサートレポート

第89回千代田チャリティ・コンサート

レイオーディオで聴く

ギターによるスペイン音楽史

6月20日　東京・湯島　千代田テクノル本社ビル

スペインの歴史と音楽を語る山口孝氏

7m立方ほどの千代田テクノル本社ビル1Fロビーに設置された，レイオーディオのWARP-1スピーカーシステムと，KINOSHITA-JMFのHQS4200UPMパワーアンプ

去る6月20日，東京都文京区湯島の千代田テクノル本社ビル1Fロビーにて，「LPレコードで聴く千代田チャリティ・コンサート」の第89回が開催された．このコンサートは，「人類が生んだかけがえのないアナログレコードを大切にしよう」と，オルトフォンジャパン(株)の前園俊彦氏の呼びかけで，(株)千代田テクノルの細田敏和氏の主催で平成5年から毎月1回，第3水曜日に開催されている．毎回テーマを決めてゲストの話とアナログレコードを鑑賞している楽しいイベントだ．

入場は無料だがチャリティ募金を募り，NGO(非政府組織)を通じて世界の恵まれない子供たちに対し，これまでに500万円以上の教育資金などを贈り続けているという．

さて今回の第89回目は，本誌連載中の「21世紀に捧げる音楽の贈り物」でおなじみ，山口孝氏による「レイオーディオで聴く，ギターによるスペイン音楽史」であった．山口氏はこのチャリティ・コンサートに毎回参加していて前園氏の目に留まり，今回ゲストとして招かれたのだ．

スペイン音楽の歴史的必然性と民族性を，山口氏はまるで大学教授のように解説しながら，その流れに沿った音楽を次々と繰り出してきた．それはセゴビアのギターに始まり，パコ・デ・ルシア，マニタス・デ・プラタを経てホアキン・ロドリーゴのアランフェス協奏曲にたどり着いた．

つねに激しく情熱的，それでいてどこかもの悲しいスペイン音楽，それはスペインの民族性が生み出した独自のもの．山口氏は決してスペイン音楽至上主義ではないが，スペイン人は最も気高い民族のひとつではないかと思っている．しかも，かつてギタリストとして活動した経験からスペイン音楽によせる想いはひとしおであるはず．その想いが込められた選曲の情熱は，氏の経歴を知らな

千代田テクノル本社ビル1Fロビー入口．毎月第3水曜日にこのイベントが開催されている

千代田テクノル
細田敏和氏

オルトフォンジャパン
前園俊彦氏

レイオーディオ
木下正三氏

CDプレーヤー操作のかたわら，ユーモアを交えながらスペイン音楽の神髄を語る山口氏

い人たちにも充分伝わったことであろう．

山口氏の情熱を伝えるには，優れた音源とそれを再生する機器が必要だ．今回のゲスト出演にあたって，レイオーディオの機材を使用することを条件に引き受けたとのこと．その機材はプリアンプがKINOSHITA-JMFのMSP-1，パワーアンプが同じくHQS4200UPM，スピーカーシステムがレイオーディオWARP-1という陣容で，レイオーディオの木下正三氏によれば，「まるでそこにオーディオ機材が存在しないかのように音楽を再生すること」を目的としているそうだ．

1曲目，「ある貴紳のための幻想曲」に針が落ちると，86名の参加者がぎっしりと座る千代田テクノルの1Fロビーは，いきなり激しくもクールな演奏に包まれた．スペインへ行ったことのない人でも，アルハンブラ宮殿に吹き寄せる熱風と宮殿の大理石の持つひんやりとした冷気を感じることができた．山口氏と木下氏は参加した人たちにオーディオ機器を語ることなく，その掲げる理想を具現化してくれたのだ．

後半はフラメンコギターが中心となった．なかでもカンテと呼ばれる歌唱の力強さと声質は，ギターの鮮やかさとともに圧倒的で，40年近く前にアナログ録音されたマニタス・デ・プラタでは，眼前に迫るギターとカンテに打ちのめされてしまった．時間の都合で「7つのスペイン民謡」は聴くことができなかったが，最後の「アランフェス協奏曲」が終わるまで，ライブコンサートを聴いているような熱気に包まれたチャリティ・コンサートであった．

千代田チャリティ・コンサートはオーディオマニアばかりではなく，いい音楽をいい音で聴きたいと願う人たちが集まる場である．そこへ山口氏と木下氏は「オーディオ再生による音楽の感動」を持ち込んだことは意義ある事件と言えるだろう．　(桂川)

問合せ：千代田テクノル総務課　小泉氏　TEL03-3816-5241

LPレコードプレーヤーを操作する前園氏．Stabiのターンテーブル，SMEのトーンアーム，オルトフォンのMCカートリッジを使用

天井が高く響きの美しいロビーは，通常は30～40名を収容するが，今回は86名もの参加者で満員になった

休憩時間にはチャリティ募金が多く寄せられ，山口氏も写真集『FIRENZE 45』の売り上げを寄付した

STRONG STREET

藤原隆司

3年のつもりが チャリティも10年目

オルトフォンジャパン㈱　取締役社長

前園　俊彦さん

月に一度、楽しみにしている行事がある。

「千代田チャリティコンサート」がそれで、毎月第三水曜の夜開かれている。主催は㈱千代田テクノル（細田敏和社長）、共催がオルトフォンジャパン㈱（前園俊彦社長）。始まりは平成5年、千代田テクノルの前社長・黒田英明さんと前園俊彦さんが「文京人懇談会」で趣味のレコードの話を交わしてからだそうで、ことし9年目。11月21日のコンサートが第93回目だから、来年6月には100回を迎える。

私も最初こそ「取材」でかけつけていたが、いまではリスナーのひとりとして毎月のコンサートを心待ちにしている。

内容も、単にアナログレコードの名作・名盤を聴くだけでなく、タンゴ、ジャズ、ラテン、シャンソン、ハワイアンのボーカルから北村英治さん、黒川肇季さん、増田一郎さん、佐藤陽子さん、小松亮太さんなど当代一流のプレーヤーの演奏も聴ける。かと思えばオーディオに目がない落語家の柳家小三治さん、放送作家の永六輔さん、俳優の浜畑賢吉さんなどが人生を語ってくれる。そこにはオーディオに関わる人々との魂のふれあいがある。

そのアレンジをしているのが前園さん。かつて、山水電気の宣伝部長をしていた頃、宣伝雑誌にゲストをお願いしているうちに人間の輪ができてしまったらしい。驚くのはそうした人間の輪がいまも続いていることである。かねがね「60歳を過ぎたらボランティアをしたい」と話していたから、趣味やビジネスに深く関わるこの仕事は、すでに前園さんのライフワークになってしまった、と言ってもいいだろう。

「3年くらい続けてみましょうか」といった軽い気持ちのスタートが、10年目を目前にしているのも、千代田テクノルのトップ、そして前園さんの執念がそうさせているように思えてならない。

こうしたコンサートは、年を重ねるごとに金属疲労を起こすものだが、最近では時間ぎりぎりだと座る席がないくらい、熱心なリスナーによって占められている。「いつも10席とか15席増やしているんですけど」

前園さんも嬉しい悲鳴をあげている。日頃ボランティアには無縁な私も、楽しみながらチャリティができるこの催しの一隅を大事にしている。